

健康文化

島旅三題

一 屋久島・トカラ列島 諏訪乃瀬島・小笠原父島 一

北川 勝弘

1 はじめに

一昨年（2010年）の春から毎年、私は島旅に出かけるようになった。そのきっかけは、3年前の春に、元林野庁の職員“3人組”から米国アリゾナ州のグランドキャニオンへの旅に誘われて同行し、面識を得たことにある。

今から35年ほど前、その3人はちょうど職場が一緒だった時期で、海釣り好きの仲間同士として親しくなり、その後、それぞれ各地へ転勤してからも、その交友関係はずっと続いてきた。3人のうち最年長のAさんは、名古屋大学林学科の出身で、営林局の治山砂防分野では学者肌の職員として局の内外でよく知られていたが、定年退職後も林業関係のコンサルタント会社などに勤務され、学者肌の持ち味を活かして活躍された。また、他のお二人は定年退職後、出身地の九州（熊本県と鹿児島県）で共に森林インストラクターとして、熱心に森林・林業の啓蒙活動を続けておられる。

この3人とも酒豪である。私がアルコールに弱いにもかかわらず、Aさんからグランドキャニオンへの旅に誘われたのは、私が酒席の雰囲気と共に楽しむ点では“心配いらない奴だ”と“評価”してくれたからだろう。

さて、本稿では、いずれもAさんの発案で実現に至った3つの島旅について、いくつかのエピソードを書き留めることにしたい。

2 屋久島への旅

一昨年（2010年）の3月初旬、私は名古屋市に在住のAさんからお誘いを受けて、2泊3日の屋久島の旅に出かけた。同行メンバーは、その前年の北米グランドキャニオンの旅で一緒だったAさんたち3名と、今回はもう一人、Aさんと同じプロジェクトでずっと一緒に取り組んできた、若い同僚の方。その彼は、私が現在住んでいる岡崎市東部の同じ地域に在住で、私たちは以前から面識があった。

今回の屋久島行は、1993年に世界自然遺産に登録された屋久島の屋久杉原生林に思いきり触れることが、主眼だった。ただし、あいにく、縄文杉に近接す

る林道が崩れているため、縄文杉を直接見ることは日程的に不可能だと、出発前に知らされていた。

名古屋・岡崎組の私たち3名は、午前8時少し前に中部国際空港を発ち、鹿児島空港で熊本市から参加の“林野庁OB3人組”のAn氏と合流した後、3時間後には屋久島空港へ到着。そこで再会した“3人組”のH氏は、すでにレンタカーを借り上げてくれていた。

屋久島での行動日程は、次の通り。1日目：午後、レンタカーで淀川登山口まで上り、花乃江(はなのえ)河(ごう)湿地まで往復(花乃江河は、九州の最高峰・宮之浦岳(1935 m)から3.8 kmの地点)。2日目：ヤクスギランド散策と土埋(どまい)木(ぼく)の見学。3日目：屋久島の海岸沿い道路一周。16時に屋久島空港発。

3日間の屋久島探訪は、私たち一同に、世界自然遺産登録にふさわしい、屋久杉原生林が古くから保ち続けてきた豊かな生態系や、それに伴う様々な奥深い魅力を、改めて再認識させてくれた。自然生態系の現場で私たちの一行は、植生や地質、気候などとの関連について、存分に意見を交しあい、“科学の目”で自然を眺めることの楽しさを満喫した。その他、島内ドライブ中にヤクザルの群れと何回も出遇ったり、ポンカンとレモンを交配して作られたというタンカンのジュースがとても美味だったことなど、忘れがたいことがたくさんあった。それらの中で、ここでは、屋久島旅行から帰った後の、縄文杉にまつわる一つのエピソードを紹介する。

今から37年前の1975年4月、日本林学会大会が九州大学で開かれた折に私は、北海道大学林学科の若手教官たちに誘われ、一緒に屋久島へ出かけた。縄文杉を見学してから宮之浦岳へ登った帰路、ふたたび縄文杉の前を通りかかった時、偶然、作家の幸田文さんと出会った。数名の営林署職員たちが同行していた。驚いたことに、同行者の中に、私が東京大学林学科の学生時代に教えを受けた森林害虫の専門家西口親雄先生と、森林植物学研究室で何回かお会いしたことのある、シダ植物の専門家山中寅文氏がおられた。私はその時、縄文杉の前で幸田さんたちと一緒に記念写真を撮ってもらった(写真)。縄文杉の根株の上に直接、腰をおろして写真を撮るなど、今の時代であれば颯(ひんしゅく)ものだろう。しかし、当時はまだ、木道で縄文杉を囲んで人々が根株を踏みつけないようにする措置はとられていなかったのだ。

私は屋久島滞在中に同行の諸氏に、30数年前に縄文杉の前で幸田文さんと出遇ったことを話した。すると、An氏が、ちょうどそれと同じ頃に、縄文杉を見たいという幸田さんを現地へ案内したと、彼の義兄から聞いたことがある



写真 屋久島・縄文杉の前で幸田 文さんと出会う（1975年4月）
（左から山中寅文氏、幸田 文さん、筆者、西口親雄先生）

という。岡崎に帰宅後、私は先の記念写真を探し出し、メールでAn氏に送った。すると、写真の左端に写っている人物は紛れもなく自分の義兄だ、という返事がすぐに返ってきた。世の中は狭いものだ。

その後、An氏は、ご自分が開設しているホームページを通じて、当時の営林署職員だった人たちに、幸田さんの縄文杉見学のいきさつに関する、さらに詳しい情報を寄せてほしいと呼びかけた。そして、集った情報をとりまとめ、「幸田文さんの縄文杉登山奮闘記」（CD版）を作成された。その粘り強い取り組みは、まさに敬服に値する。その記録によれば、当時70歳を過ぎていた幸田さんを、営林署の屈強の若手職員2名が交替で介添えし、朝6時に宿舎を出発して、縄文杉を見学した後、夕方6時に帰着した、ということである。写真に写された幸田さんは、長らく憧れ続けていた対象に出会えた喜びからか、とてもおだやかな表情で、凜とした気品を湛えておられるのが印象的である。

なお、このときの幸田 文さんの縄文杉訪問に関しては、上記の西口先生が次の著作中で触れておられるので、書名を挙げておく。

西口親雄：「木と森の山旅 — 森林遊学のすすめ —」. 八坂書房、1994

3 トカラ列島 諏訪乃瀬島への船旅

日本で一番活発な活火山は、鹿児島湾内にある桜島（1,117 m）。それでは、二番目はどこだろうか？ 答えは、屋久島と奄美大島とに挟まれたトカラ列島中の諏訪乃瀬島にある、御岳（おたけ；799 m）である。諏訪乃瀬島は、鹿児島県十島村に所属し、トカラ列島中では面積が二番目に大きい、人口は50人で、列島内の有人島中では一番少い。鹿児島市の南南西 240 km に位置し、その島の中央に霧島火山帯に属する御岳がある。現在も毎日、噴煙が間欠的に上がり続けていて、火口から半径 1 km 以内は立ち入り禁止とされている。

その諏訪乃瀬島への船旅に、私は昨年（2011年）4月はじめ、Aさんに誘われて、一緒に出かけた。今から35年ほど前、奄美大島の営林署長を務めておられたAさんは、用務でよく乗船する奄美大島～鹿児島間のフェリーから眺める、トカラ列島の島々の港付近で見かける植生が、他の地域と比べてかなり異なっている、という印象を持たれた。確かにトカラ列島は、渡瀬線という、動植物の南限・北限を区切る生態学上の重要な地域区分の帯の上にある。定年退職したら、いつの日か、これらの島の植生を自分の目で確かめてみたいものだとの思いを、Aさんはずっと胸に秘めておられたようだ。

今回の旅程は、次の通り。1日目：12時40分、鹿児島空港着。23時50分、十島村村営フェリー「としま」（週に2～3便だけ就航）で鹿児島港発。2日目：9時50分、諏訪乃瀬島着。午後、御岳の火口近くまで接近後、下山路で周辺の植生観察。民宿に1泊。3日目：10時30分、フェリーで諏訪乃瀬島発。20時30分、鹿児島港へ帰着。4日目：鹿児島営林署管内の桜島治山工事現場等を視察。17時10分、鹿児島空港発。18時25分、中部国際空港着。

今回の旅は、フェリー乗船時間が片道10時間もかかり、島内滞在の実時間がわずかに24時間余であり、かなり慌ただしかった。しかし、“林野庁OB3人組”は皆、植生分布の観察に関してはプロの眼をお持ちで、私たち4人は、御岳火口から海岸までの道をたどりながら、島の植生状況に関して忌憚のない意見を交しあった。やはりリュウキュウチクが存在が諏訪乃瀬島の植生の特徴となっているようだねなどと、“科学の眼”に基づいて交される同好の士の間でのおしゃべりは、結論はどうあれ、私たちの心をおおいに和ませてくれた。

ところで、諏訪乃瀬島は、江戸時代後期の文化10年（1813年）の御岳大噴火で、島の東西にあった50余りの人家が消滅し、全島民が隣接する島々に避難・移住し、その後の70年間、無人島になった歴史を持つ。明治時代に入り、1880年代の半ばに奄美大島からの入植者による開拓が始まったが、元の諏訪乃瀬島

の住民は、ほとんど島に戻って来なかったという。それは、無理もないことだろう。何しろ、その間には、70年間という、とてつもなく長い時間が流れたのだ。今年、古希を迎えた私には、その時間差の意味するところがよくわかる。

フェリー接岸港の近くの道路脇に、明治維新を挟む70年間にわたり、火山噴火のために島からの退避を余儀なくされた、かつての島民たちの苦難の歴史を綴った看板が立てられていた。私はそれを読んで、つい1か月前の3月11日、東日本大震災の最中に東京電力福島第一原子力発電所で発生した事故により、放射能汚染を避けるべく、生まれ育った故郷から無理矢理、退避せざるをえなくさせられた大勢の人たちの苦難が、重ね合わせて思い返された。

火山爆発は天災だが、原発事故は紛れもなく人災である。福島原発事故の発生に伴い、放射能汚染被害を避けるために郷里を離れざるをえなかった人々については、行政の避難勧告による退避や、自主的な判断に基づく退避の如何にかかわらず、きちんとした生活面・精神面での救済措置を長期にわたって実施すべきだと、私は考える。

4 小笠原父島への船旅

今年(2012年)の3月下旬、私は小笠原父島への6日間の船旅を行った。そのきっかけは、やはりAさんによる小笠原訪問計画へのお誘いだった。しかし、その実施時期が昨年の9~10月頃とされていて、私立大学で出講している私には、日程面で不都合だった。それで、今回の小笠原島行は、私大の長期休暇時期に合わせて、今年の3月に出かけるという独自の計画を組んだ。

小笠原諸島は、今まで一度も大陸と陸続きになったことがない海洋島で、東洋のガラパゴス島といわれ、自生植物300余種のうち、固有種が4割以上を占め、進化の実験フィールドといえる。この多様な生態系の存在と、進化の過程が科学的に良く研究されている点が評価されて、小笠原諸島は昨年6月に世界自然遺産に登録された。東京竹芝桟橋~小笠原父島の二見港間を、6,000トンの大型船「おがさわら丸」が6日目ごとに、25時間半かけて就航している。

今回の私の同行者は、妻とその友人の女性たち5名で、総勢7名のグループだった。旅程は、以下の通り。1日目：早朝に新幹線で東京へ。10時に東京竹芝桟橋を出港。船中泊。2日目：11時25分、小笠原父島の二見港着。民宿で休息。旅行社によるコウモリ見物ナイトツアー。3日目：レンタカーで父島の島内観光。4日目：山登り組と海もぐり組に分かれてツアー。5日目：14時に二見港発。船中泊。6日目：15時30分に東京竹芝桟橋着。

小笠原父島の多様な生態系を味わうために、各種ツアーが用意されている。

私たちの宿は、父島南端の二見港に近かったが、4日目のツアーは、島の最北端の絶壁に至る樹林中の山道を歩くという、願ってもないコースだった。その道筋では、第二次世界大戦中の日本軍が残した武器などの残骸があったり、ガジュマルの密林が繁茂していたりと、まさに多様な生態が見られた。ヤギやアカギ、モクマオウ、あるいはグリーンアノール（外来のトカゲ）など、外来種の撲滅に向けた精力的な取り組みが行われていることも、よくわかった。

ところで、3日目の島内観光では、35年ほど前に小笠原父島へ移住した、妻の従姉妹のご夫妻が、レンタカーの事前予約や当日の運転と見学地案内など、全面的に協力してくれた。そのご主人と私は、とある海岸の砂浜で並んで座り、昼食の弁当を食べながら、過ぎ越しお互いの人生中のエピソードを、ポツリポツリと語り合った。ご主人が、一緒に離島に移住してきた奥さんを思いやる温かい心根の方であることが、すぐに感じとれ、私の心はととてもなごんだ。

5 おわりに

私はこの3年間で3回の島旅に出かけてきたが、自分の動線を長くすればするほど、いろいろな風物や人物と出会えて、自分の人生的な喜びや楽しみが一層広がっていくことを、実感した。その喜びや楽しみに対する希求は、70歳という年齢になっても、少しも衰えることはない。今、私が一番大事だなと感じるのは、自分の心身両面での健康に対する自己管理と、「持つべきものは、良き友垣」という点である。妻曰く、「誘ってもらえるうちが、花なのよ」。

最後に、小笠原滞在中の私的な体験を書き留めておこう。3日目の夕方、遠く二見港が望める斜面上の樹林内に設けられた野外喫茶店で、私たち一行は、案内役を務めてくれたご夫妻と一緒に、最後の談笑に興じた。その時、私はふと、自分の現在の心境を謳った詩を吟じてご主人に捧げよう、と思い立った。昨年からは習い始めたばかりの詩吟なので、出来映えの程は知れたものだが、わが想いだけは伝わるだろうと考え、二見港の方に向かって高吟したのであった。

吟じたのは、方巖和尚作の「無題」という、七言絶句。その転句と結句が、今年二月に古希を迎えた私自身の、まさに現在の心境を謳っている、と思える。

「七十年間 総て 夢の如し 今朝（こんちょう） 落ち尽くす 昨朝の花」

自分の人生を振り返ってみるとき、およそ「昨朝の花」の栄光などとは無縁な生き方だったが、多くの方々の好意に支えられてきたことは、間違いない。これから後のわが人生では、自分を支えてきてくれた周囲の多くの人たちへの感謝の念を忘れることなく、つとめて虚心坦懐に生きていきたい、と願う。

（元・名古屋大学農学国際教育協力研究センター教授）